

人質J○見せしめ姦

上下串刺しサンドイッチF○○K

オナホ扱い

最強退魔師榛名ミカが妖魔の罠にはまり
徹底凌○の果てに末路を迎える
救いなしの無惨END！
地獄のフルボッコ凌辱CG集

暗い波止場、打ち捨てられた工場跡地の一角、
今はもう使われなくなったゴミ処理場の跡地、
もはや人の踏み入らなくなったその奥で、
戦闘の音が響き渡る。
打撃音、そして肉の焼け焦げる臭気。
「もう逃さないわよ!」

豊満な体の美女が指先で印を結び、呪文を唱える。



東京でも最強と目される退魔師
榛名ミカの姿がそこにあった。
グラビアアイドルもかくやというほどの豊満な体を
退魔レオタードに包み、Gジャンをフツに羽織った
姿は妖魔の恐れと情欲の対象だ。

女退魔師——榛名ミカの持つ宝具に
霊力が込められ、そして。

「くらえ！
雷撃！」

「グギヤオオオオオオオッ！」

迸る激しい雷撃とともに、
身を焼かれた妖魔の絶叫が響き渡る。



「ふん、あっけないもんね
この私を呼び出した割には」の程度の雑魚妖魔しか
いないのかしら」

肉の焦げる臭臭が漂う中、不敵に笑うミカ。
その先では、先ほどまでいた妖魔が黒焦げになって
炭と化していた。

親友であり、退魔師の後輩である主をさらわれたのは、
数時間前のこと。
ミカのもとに、返してほしければ廃ミカ処理場がある
波止場まで来いとメッセージが残されていたのだが。



「だって、これでお終いみたいね...
それにしても、主...」に連れて行かれたの？」

——ズン！ 暗闇の奥から地響きのような物音。

そこには、全身が巨大なペニスのような姿の不気味な妖魔と、その触手で捉えられた圭の姿があった。両手両脚を大きく開かされた状態で拘束され、両胸を触手でまさぐられていた。

「やっぱり、バカ正直に来たなあ、榛名ミカア！」



「圭!! なんてことを……
彼女を放しなさい!
さもなければ……」

「どうするってんだい？ この状況でさあ。
お前はオレに命令できる立場じゃねえたるお？」

ミカはぐっと言葉を飲み込んだ。
妖魔の凶器は圭の股間にあてがわれている。
自分が何か行動を起こせば、容赦なく圭を貫くだろう。
あのサイズ差だ、圭が無事で済むわけがない

「ミカ！ 私のこととは構わないで！
妖魔の言うことなんか聞いちゃ……あぐううう……」

「へえ？ お前の可愛い後輩は
「う言ってるけどよお、どうするの？」

妖魔は小馬鹿にした口調で
ペニス状の頭部をグリグリと押し付けた。



「よーしー、そんじゃあ」の女の言う通りに
してやろうかー」

妖魔は狂喜に満ちた声で叫ぶ。

「な、何をするつもりっ？」

「何きって、『インをマイン』になち込んでやる」
決まってるんだろおっ、いいねえ、震えちやつて……
そんな女をぶっ壊すのはやめられねえよなー」

「ひひひひひ」

覚悟を決めたはずのまだつたが、あまりにも巨大な
肉棒の存在に、恐怖の悲鳴を上げ、小刻みに震えだす。

「や、やめてっ！ 解ったわ、
私は抵抗しないから……
圭を助けて!!」



「んん？」「この女のために体張ろうってのかあ？」

妖魔のバカにしきった言葉に、ミカは鋭い視線で睨みつけながら応える。雑魚妖魔共を押し分け闇の中から数十本の触手が伸びてきたのだ。それまでの雑魚妖魔たちとは明らかに違う妖気その威圧感にミカは身構える

「当たり前でしょ！ 仲間を見殺しにするわけがない…お前たち妖魔と違ってね！」

（真打ち登場ってわけね…
いいわかつてらっしゃい!!!）



「ぎゅぎゅー…そんじやあ、その言っただけ
見せしてもらはなでやねえかー！」

「おらおらおらおらあああああああああああつー！」

妖魔は無数の触手を振り回し、ミカに叩きつけた。
四方八方から鞭のように降り注ぐ触手の攻撃を、
ミカはまともに受けることになる。

「うぐっ！ ああああつー！ く、こんな、ことだつー！
あ、あきいっ！ うぐあああああつー！」

「まだまだくたばんじゃねえぞお！
ひひひひひ、退魔師をホコるほど楽しい」とはねえなあー！」



ふいに嵐のような攻撃がやんだ。
足元はおぼつかないが、まだミカは立っていた。
その瞳は戦意を失っていない。

「ぐうぐう……ぐうしたの、もう終わり？
それなら、圭を解放して！」

「はあ？ バカじゃねえの
お前にまだ見て貰いてえもんがあるからな」

「その前に壊しちゃまうのもつまねえからなあ」

（どうやらついでにもりなの「」の妖魔……）
警戒するみかの目の前——



「今から、この触手共の相手をしてみな。全部受け止めて、それでも生きてたらこの女と一緒に開放してやるよ……」

「ん、チャンスをくれてやったんだぜえ？
お前さえ我慢できりゃハッピーエンド。
感謝してもらわねえとなあ！
ひひひひひひひひひひ！」



ミカはぐつと唇をかみしめたかと思つと、
不敵に笑つて見せた。

妖魔の脅しに屈してはいけない。

「ふん……アタの粗末な触手なんかで
私を満足させられるかしらね？」

「うひょー！ その『私は屈しません！ キリッ！』みたいな
口調、いいねえ！」

妖魔は小馬鹿にした口調を崩さない。
それどころか、残忍に笑つと……。

「後悔すんなよ、ミカー！」



ぬうっと、野太い触手がミカの股間に近づく。

(な、何よこれ!? こんな、入るはずが……)

それはミカの腕よりも太く、凶悪ないぼでおおわれていた。

「まずは「イツ」からだ。いきなりへばるなよおっ。」

妖魔は嬉しそうに下卑た笑いを浮かべながら触手を蠢かした。

「へん………なんなん………
うん………うん………
うん………うん………」





く、苦しいっ！でも、私が耐えなきや……
圭が……それはダメ！

あまりの苦痛に意識が飛びそうになるが、
何とか踏みとどまろうとするミカ。

「うぐっ、はひひ……う、きいてる……」

「お？ まだまだ頑張れるよなあ？
さすが最強退魔師（笑）！ 泣かせるねえ」

「だ、黙れえ……この、下劣な、妖魔があ！」



「、こんな触手なんかで、私をどうにかできるなんて……」

強がり口を口にしようにとしたミカ。だが、股間に迫ったもう一本の影を見るなり表情が凍り付く。

「ぎひやひや、どうやら最強退魔士さんにはこの程度の触手じゃあ物足りねえみたいだなあ。とんだ、どスケベ退魔師だぜえ！」

「なっ！ ま、まさか、もう一本、なんて……」

「おおあたりよお！ ぎひひ、二本も啜え「みゃマン」も大満足だろ」



「ま、待って、そんな入るわけ……
あぎやああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああ！」

「無理かどーかなんて知るかよ？
関係ねえんだよ、ボケ、おほ、入るじゃねえかボケッ」

もう満杯だったミカのアソコに、
無理やりもう一本触手がねじ込まれる。

「抜いてええええ！」「われえ、あがおぐえええええ
ええええっ！」



「ん、どうした？ すっかり大人しくなっちゃってよお人質がいるってこと忘れてねえか？」

妖魔の言葉に、薄れかけていた意識が引き戻される。内臓をぐちゃぐちゃにかき回される激痛に耐えながら、ミカは歯を食いしばる。

（た、耐えなきゃ……じゃないと、主が！それはダメよっ！）

最強退魔師の呼び名にかけても、負けられない。

「ふ、こんな粗末なものでしか女を、屈服できないってわけね……」



「ミカっ！ 止めて、お願い
ミカを助けて！」

触手に囚われた圭が必死に呼びかけるが、
妖魔はいやらしい笑いを浮かべたまま。

「ああん、これはゲームだつてんだろ？
先輩退魔師様が頑張りやお前も助かるんだよね、
そこで応援してな」

「そ、そうよ……圭。うんうん……
私なら、大丈夫だから……」

苦痛に悶えながらも、ミカは圭に
微笑んで見せた。



「……まあ、でもよお？
先輩頑張ってるのに、先輩が
暇」いてちゃだめだろうがよ？」

ミカと圭のやり取りを見ていた妖魔が、
急にそう漏らすと、触手をうねらせて
圭に近づけてきた。

「ひゅんん」

怯えて息をのむ圭。

「何をするつもりっ！
圭には、手を触さない約束でしょ！」

嫌な予感がする。
ミカはアソコをほしくられながらも
必死に声を上げた。



「だからあ。

後輩も少しは根性見せろって」なんだ……ふっ……」

言うなり、妖魔は圭の口に触手をねじ込んだ。

「んむんむんむんむんむん……んむん、うんんんん……」

野太い触手は、圭の口を性器に見立てて縦横無尽に暴れ回る。

「ぐぐぐ……」舌が気持ちいいねえ……もっ……喉の奥、締めろや、」「うあ……」

「圭っ、圭っ！

やめてえええっ！

約束が違う……っ……」



「ああん、別にいいだろうが。
「気に入らぬ」なんて殺してないだけマシだろW」

妖魔は小馬鹿にした口調を崩さない。
残虐そうに笑うと、更に喉の奥深くまで
触手をねじ入れた。

「んぐおおおおおおおおおっ！
お、おっぐうううううっ！
うぶ、ぶげげっ！」

気管もふさがれ、圭は窒息の恐怖に飲み込まれた。
呼吸の苦しさに、喉が波打って触手を締め上げ、
妖魔を喜ばせてしまう。

「おおーこれこれ！
死にかけの女の喉は締めりがよくていいよなあ」



「おーいおおおおー！ ななっ、なぐっ！
「圭ー！お願い、もっとめしええっ！」

（な、なに？ 喉の奥で触手が……
太くなって……！）

捻じ込まれた触手が硬さを増し、更に野太くなって
圭の喉を塞ぐ。
呼吸も支配され、苦しさに圭は喘いだ。

「ん？」「この先どうなるか、予想がついたかなあ？
そう、お楽しみの射精タイムですよっと！」

「あっ、みんぐんぐんぐん……うぐん、うっぽお
おおおおおお！」

「喜んで喉締めちゃって、可愛いねえ、圭ちゃんは！」

「やめてやめてええええええっ！
圭を助けてええええっ！」



ミカの悲痛な叫びも届かず、妖魔は大量の精液を圭の口腔内にぶちまけた。

「んびゅあああああぁあぁあつ！
べんぐ、ぎゃひひひひひひひひひひー」

圭の口では収まりきらないほどの、
大量のザーメンを流し込まれ悶絶する。

「まだまだ出るよー! ほら圭ちゃん、もつと飲んで! 零したらたじやおかねえからなっ!」

[illegible]

妖魔に言われるまでもない。
主にはただザーメンを飲み下すことしか
できなかったのだから。

「ふひいいい、出した出した。
なかなかのロマ○」だったせえ、「ちよつとまだなあ」

散々、圭の中に精液を流し込んだ後。
妖魔は満足そうに触手を引き抜いた。
入りきらなかった精液が、圭の顔を白く染める。

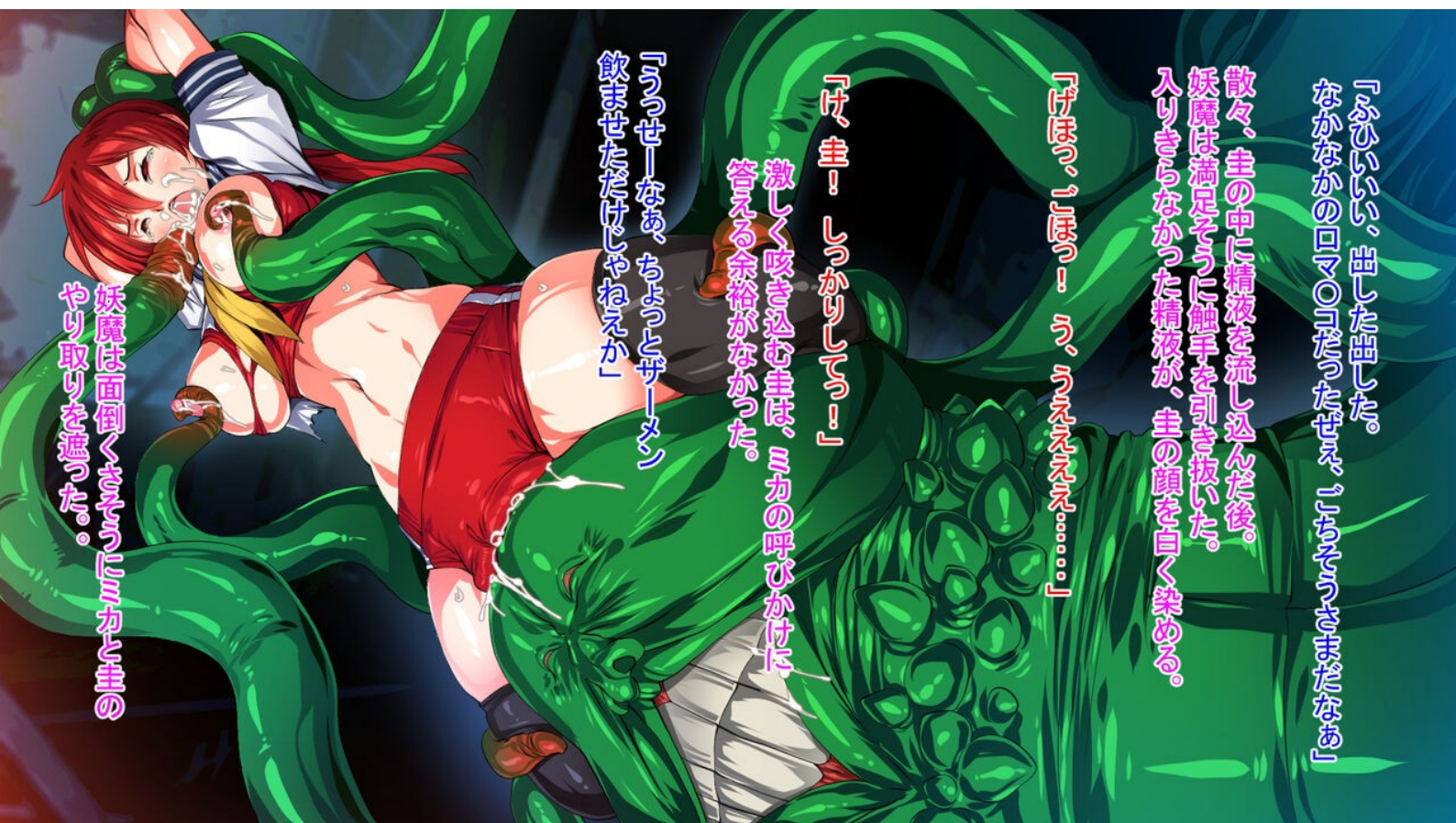
「げほう、「ほう」！ う、うええええ……」

「げ、圭！ しっかりしてっ！」

激しく咳き込む圭は、ミカの呼びかけに
答える余裕がなかった。

「うっせーなあ、ちよつとザーメン
飲ませただけじゃねえか」

妖魔は面倒くさそうに「ミカと圭の
やり取りを遮った。。」

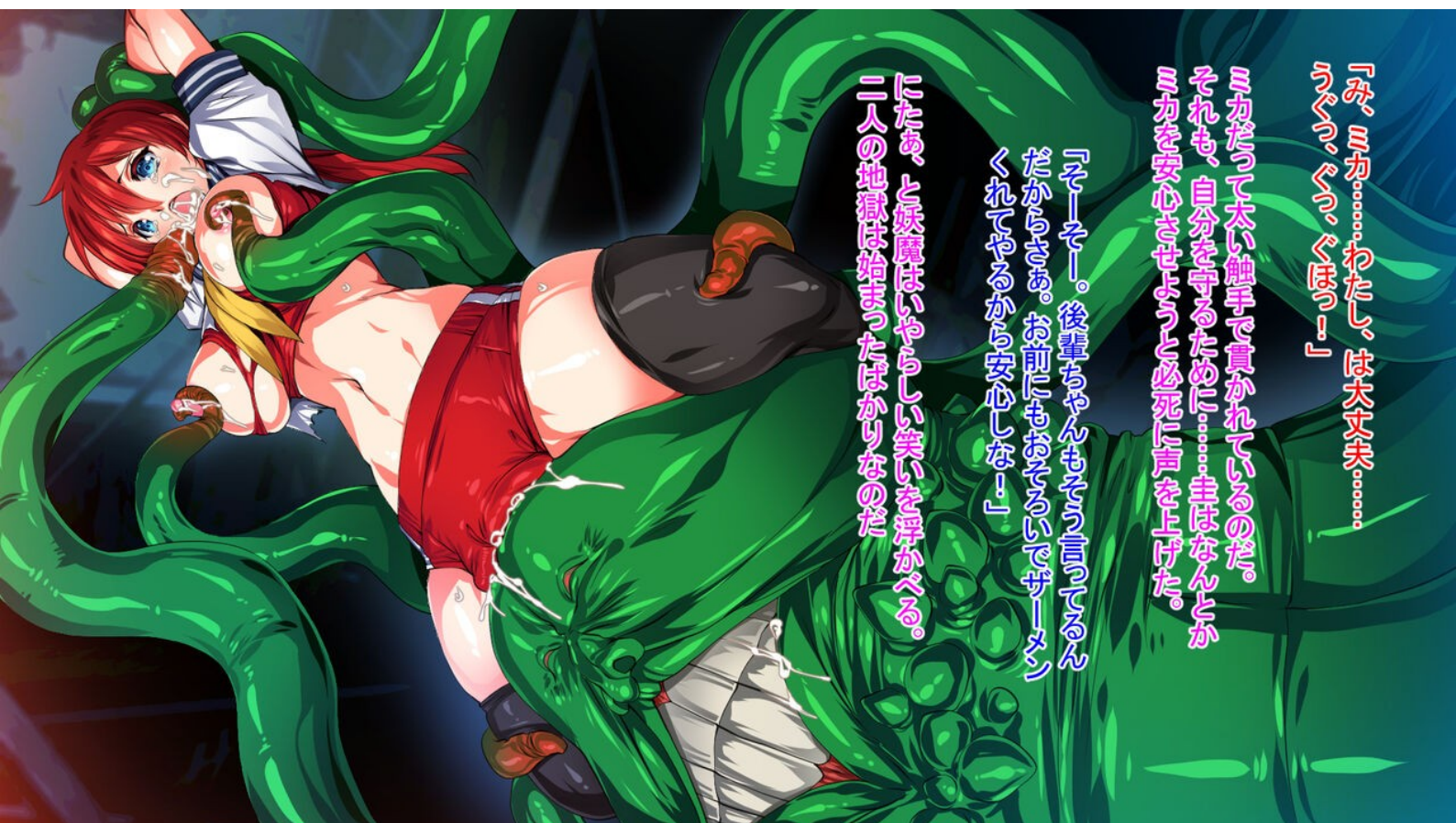


「み、ミカ……わたし、は大丈夫……
うぐっ、ぐっ、ぐほっ！」

ミカだって太い触手で責められているのだ。
それも、自分を守るために……圭はなんとか
ミカを安心させようと必死に声を上げた。

「そーそー。後輩ちゃんもそう言ってるん
だからさあ。お前にもおそろいでザーメン
くれてやるから安心しなー！」

にたあ、と妖魔はいやらしい笑いを浮かべる。
二人の地獄は始まったばかりなのだ



「いぐいぎああああああっ!!
お、お、お大きくなってるぅっっ!!
暴れっ!!」

突然襲い掛かった新しい苦痛に、ミカは絶叫する。
狭い膣の中で、極太触手が二本、よじれ合って
暴れまわっているのだ。

「言っただろ、オソロじってやるっしょー
ひひひ、」うやうやマンコの中
ぐちよぐちよ「かき回」してなあ〜」

「やめてやめてええっ!!
お腹、破れっ……おっぱおっぱっ!!」

「ええろ? 先輩ちゃんも頑張ってるんだからさ
先輩の根性見せてみるよお!!」

ミカが泣き叫ぶほど、妖魔は面白がって
触手を激しく蠢かす。



「おらあ、出すぞザーメン祭りだぜえっー！」
妖魔が嬉しそうに叫んだ瞬間。

「ふぎやあああああああああああああああああー！
出てる、妖魔の精液っ！ うへっうぎいいいいいい
いいいいあああああああああああああーっー！」

「たくさん入れてやるからな
漏らすなよおー！」

「おっほあああああああああー！
熱い、熱いっ！ いやあああああああああーっー！」

熱く、濃厚な精液は瞬く間に
ミカの胎内を満たした。
それでも、射精はおさまらない。



「んほ、なかなか乙なマ○コじゃねえか♪
さあて、オレのザーメンの味はどうだったかなあ？」

ミカの膣内に溢れかえるほど精液を注ぎ込み、
妖魔は満足そうに尋ねた。

「ぐっ……ぐっぐっ………だ、耐えたわ、ようや
さあ、圭を放して………」

ミカの瞳にまだ光が消えていないことを確認した妖魔は、
更に残酷そうな笑みを浮かべた。

「きひひまだまだ元気じゃねえか？
それじゃ、第ニラウンズに………」



「おら、次は誰がやるんだあ？」

馬面の妖魔が、触手二本挿し凌辱を受け
苦しげにあえぐミカの体を無理やり持ち上げる。

「待つてました！ 次は俺！
俺の番な？な？」

「うぐっ……はうう、はあう……
は、放して……っ！」

馬面の妖魔が、触手二本挿し凌辱を受け
苦しげにあえぐミカの体を無理やり持ち上げる。

「そう言われて放すバカはいませーん！
ブエエエーン！」

先ほどまでの激しい凌辱のせいでぼつかりと
口を開いたままのマ○コを晒す羞恥の体勢。
ミカは悔しげに唇を噛んで、顔を赤らめた。



「に、二匹も相手するなんて約束、
していないわよう！ 早く圭も放して！」

声を荒げるミカに、馬面妖魔は
下品な笑い声を浴びせた。

「それはあゝ、ミカちゃんの頑張り次第とゆーかあ。
ま、とりあえずチンポ突っ込ませてよ？」

「あ、あつたなっどー！」

「いやいやあ、みぞけてないじや、
ぶひひひん」



でろん、と巨大なチ○ポがミカの股間の
間からそそりたつた。

「ひいっ!!
な、なによ、これっ!」

それは、あまりにも巨大すぎる肉の凶器
形はまさに馬そのものの

ミカの華奢な体など突き破ってしまいそうだ。

「うそっ、まさか、こんな……」

「こんなの、入れるなんて……!」

「イヤイヤ、入れる以外に何をするのさ？」

「そっすう、こいつでスッポスッポついてあげるからさあ
腹が破けないようふんばりな、ふひひひんっ！」

「む、無理なお！
こんなの入るわけないっ！」

ぴゅっ、
ぴゅっ

ミカは顔を引きつらせて叫んだ。
その表情に恐怖が浮かび上がるのを見て、
増々妖魔たちは盛り上がる。



「入らない、じゃなくて入れちゃうんでーす！
いくよおおおミカちゃーん」
「うわーんうわーんうわーんうわーんうわーん」

めりめりと音を立ててペニスが
ミカの胎内に潜りこんだ。

野太い凶悪馬チのボは、あつという間にミカの胎内をみたし、
ポコッ！と薄い腹の皮を突き上げた。

「やめええっ！ あつがあああああああああつ！
さけるさけるうううううううううううー！」

チ○ポで腹をボコらされた時の退魔師の顔おこの顔と声を楽しみにしてたんだよお！」

ああああっ！ひいひいひいひいひい
おおおおおおうー！」

ズボズボグボグボと長大なテ〇ポがミカの腹を突き上げる。そのたびに、ミカはつぶれたカエルの様な悲鳴を上げるのだった。

「ほらほらあ、頑張つてマンコ締め付けなよお？
じやないと、妹分もやつちまうぞお！」

「うっぐうっぐうっ！
け、圭は……いっぎ

「け、主には手は出させない………!!
はぐっ!!」「こ、こんなお粗末なもので
私をどうにか……あひいっ!!
出来るなんて、思わないでっ!!」

苦しみにも悶えながらも、必死に主の「とき
思うミカの発言。だが、それは逆に
妖魔の残虐な心を煽ってしまった。

「ひっひっひっ!!」

「そうかそうかあゝミカちゃんはこれじゃあ満足
できないんだねえ? だったらあ」



「あっかあああああああああああああああああああ
あああああああああっ！」

妖魔の掛け声とともに
テオポのサイズが跳ね上がり、
ミカの口元に届くほどに伸びた。
当然、内臓も押しつぶされ、ミカは
突如訪れた激痛に目を見開く。

「な、なにこれっ、お、おち○ぽおおおつ！
ぐるじ、あ、っ」おおおえええええええ！」

ぶべっ、おつぶあああああああ
あああああっ！」

さっきの威勢はどうしたよお？

ウヒヒヒ、腹ボコ越しのフェラチオ
気持ちいいヒヒヒーン」

妖魔の巨大すぎるチ○ポが容赦なくミカのマ○コを挟む。

「ぎよああああつ！ やめでやめでええええええええええええつ！ ぐっぺっ！」

[illegible]

「お友達の」と、忘れちゃってるんですかーって……
あらら、活きが悪くなっちゃった」

あまりの苦痛に、ミカの意識は飛びそうになる。
ぐるりと白目をむき、意識は暗闇に落ちようとした、
その時。

「はい、気付け薬だよ！
ぶひっひひん！」

どばどばと亀頭から大量に精液が
注ぎ込まれ、ミカの体が跳ね上がる。
自分の腹越しにデ○ポからびゅくびゅくと
射精する感触を口に味わうという異常な
痛苦にミカは悶絶する。

「うぶぶぶぶぶ……んぐんぐんぐん
おぶぽおおおあああうー！」

「せうかくだからねえ、一滴残らず飲んでよねえ！
ひーひっひっひひーあ、中を出してるから
口から飲めないかあ」
後から後から注ぎ込まれるザーメン。
行き場をなくした白濁液が、結合部分から溢れかえる。



「へへーいやあ、出した出した」

どれほど経ったのだろうか。
ようやく妖魔はペニスを引き抜いた。

「おっぱあ……あがががつ
ぐーぐー」

「ミカちゃん、びくびくしちゃって
ようぼとチンポ良かったんだね
チンポ舐めてくれる舌の感触も
ベリーグッド」

「さすが、ピッチ退魔師！
おチンポ大好き娘！」

妖魔の嘲る声も、もはやミカの耳に届かない。





「さあて、今度は俺たちの番だア」

「ぶひひひひひ、だいぶ待たされたからなあ……」

ミカの四肢を掴みあげると、エド反りの形に固め、
二体の妖魔が前後に立った。
豚の顔をした妖魔は、にやにやと下卑た笑いを浮かべる。

「う、ぐ、ぐ……は、放して」

リバーズロメロのような形でキめられミカは
痛みに顔をゆがめる

「ハア？、テメエ馬鹿が放すわけねえだろうが
死ぬほどガン突きしてやつから覚悟しなあつー」

「俺たちの番が回ってくる前に、ぶっ壊れちまうんじゃ
ねえのか、心配してたけどよあ、
退魔師ってやつは頑丈で助かるぜぶひひひひひひ」



「まあ、でもあんまり待たされ過ぎたんでチ○ポがこんなになっちまったけどな」

でろん、と巨大すぎるペニスがミカの前に突き出された。

股間にも同じものを感じ、息をのむミカ。

「ひいっ！
な、何、それ……」

「ぐんぐんぐんぐん、退魔師の女の恐怖に至る顔、
「それがたまらないよなあ……」

先ほどの馬型妖魔にも劣らない極悪な肉の凶器。
ミカの顔が恐怖で歪む。

「い、いやああああっ！
無理、もう無理……そんなの、入らないっ！」

「……なあんだ、もうギブアップか。
そんじや、後はもう一人で楽しむとするか
ぎひひひっ」



「……っ」

ミカの瞳に力がよみがえる。
そうだ、最強退魔師の誇りにかけて
主を凌辱に晒すわけには行かない——っ！

「け、主には、手を出させないわっ！
私が二人まとめて相手してあげる！」

「……笑わせてくれるねえ
て」とは好きにやって良いんだなあ？」

「す、好きにすればいいわ……！」

ミカは精いっぱい力の強がりを入れて、妖魔を睨みつけた。
だが、それはかえって妖魔の嗜虐心をあおってしまう。



ぐぼおー！きーー！

音を立ててミカの口とマ○コに
極太チ○ポが突き刺さった。

「んほおおおおげええおおおおおおおお
おおおおおおおおおおー!」

「ま、最初から遠慮する気はなかったけどなあ
ぶひひひひひひひひひひっ!」

（あ、あ、あ、顎がっ！
はずれるうっうっうっ！）

口はチ○ポのイボでゴリっと膨らみ
ミカの端正な顔が歪んだ

ג. חג אור אור אור אור אור

「よし、目覚めの一発だっ、ぶひっ」

「うっうっうっぽおおおおっ!!」

豚妖魔は前後から同時に腰を突き入れた。
ミカの喉の奥深く、そして子宮に潜り込んで
更に内臓を押しつぶしてペニスが侵入する。

ぬ

ぬ

ズン

ン

「おっがあああああああああああっ!!
うぽっ、ぐぐぽべべべべべべべべっ!!」

「よしよし、締めりも戻ってきたなあ、
マ〇肉がビクビク締めつけてくるぜえっ!!」

「ぶひひひひひ痙攣してるだけ、っだろお」

ズン
グン
グン
グン

「そんじゃあ、潰しきつちまつ前」……」

妖魔が腰を引くと、ずるずると
巨大チ○ポが引き抜かれる。

「おっほおおおおオオオ……」

「は、早く抜けてえ……はやくはやくはやく」

不自然な形で折りたたまれた体に、喉を塞ぐ肉棒。
子宮を押しつぶすチ○ポ。
どれもがミカを苦痛と絶望のどん底に陥れる。

「ふひひひひひっ、カリがゴリゴリ」すれて
マ○」がキュウキュウいつてやがる」

全てが抜け落ちるぎりぎりまで引き抜かれ、そして。



「チ○ポ好きなんだろ、チ○ポオオオ！」

再び、ミカを串刺しにする勢いで前後から子〇米が突き込まれた。ミカの顎関節は外れ、子宮は醜くひしゃげてしまっている。

「なんだ、お前のチ○ポとぶつかってんぞ！」

その言葉通りミカの体内で上下から突き進んだチ○ポがゴ○ゴ○とぶっかり合っているのだ

「良いじゃねえか、相棒よお
ひひひひひひひ、この状態で射精したら……」

妖魔は同時に叫ぶと、ミカの胎内に大量の精液を放った。喉の奥で白濁液が渦を巻いて爆発する。つぶれた子宮の中にトドバと注ぎ込まれ、腹の中であふれかえる。

「おらあ、死ぬ気で飲み干しなあ！」
「一滴も無駄にするんじゃないぞお！」

「んっ雌の子袋にザーメン流し込む」の幸せ♪
たまらんあゝぶひひひっ」

うっとりとした様子の妖魔は、延々と精液を
吐き出し続ける。

「おがあっ……あ、あ、あ、ぶ、げ……」

喉に注ぎ込まれる精液は胃袋をまん丸のボールに
なるまで押し広げ、子宮はありえないほど膨らまされ、
結果、ミカの腹部はザーメンの詰まった巨大な
肉袋となった。

（も、ダメ……
ザ、ザーメンで溺れるう……妖魔ザーメンに殺されるう……）



「あーっ……」

ぐるん、とミカの瞳が裏返り、白眼をむく。
ついに、ミカの意識が途切れてしまったのだった。
だが、妖魔はまだそれに気づいていない。
退魔師にザーメンをぶち込むことに夢中なのだ

「ふっふっ、肉袋が良いとまだまだ出るな
棒名ミカを犯すためにザーメン溜めて来たからなあ」

「だよなあ、並の退魔師はすぐにつぶれちまったしな
やっぱ有名な退魔師だと肉持ちが良ぜえ
ぶひ」

（「ザーめん……主……
も、もう、い、意識が……」）



「うん？いつの間にか落ちてんで、コイツ？」

ようやく、ミカに意識がないことに気づいた豚妖魔達が
テ〇ポをそれぞれ引き抜いた。

引き抜かれた途端に口とマ〇コ、両方の肉穴から
ドバドバと精液が噴水のように吐き出される。

「ぶひひひん！フザマだねえ！」

皆さん、この精液袋が最強退魔師ミカの今の姿ですぜえー！」

ミカの体はザーメンを吐き出すためにビクつく
皮肉なことにそれがミカがまだ生きている証拠だ。

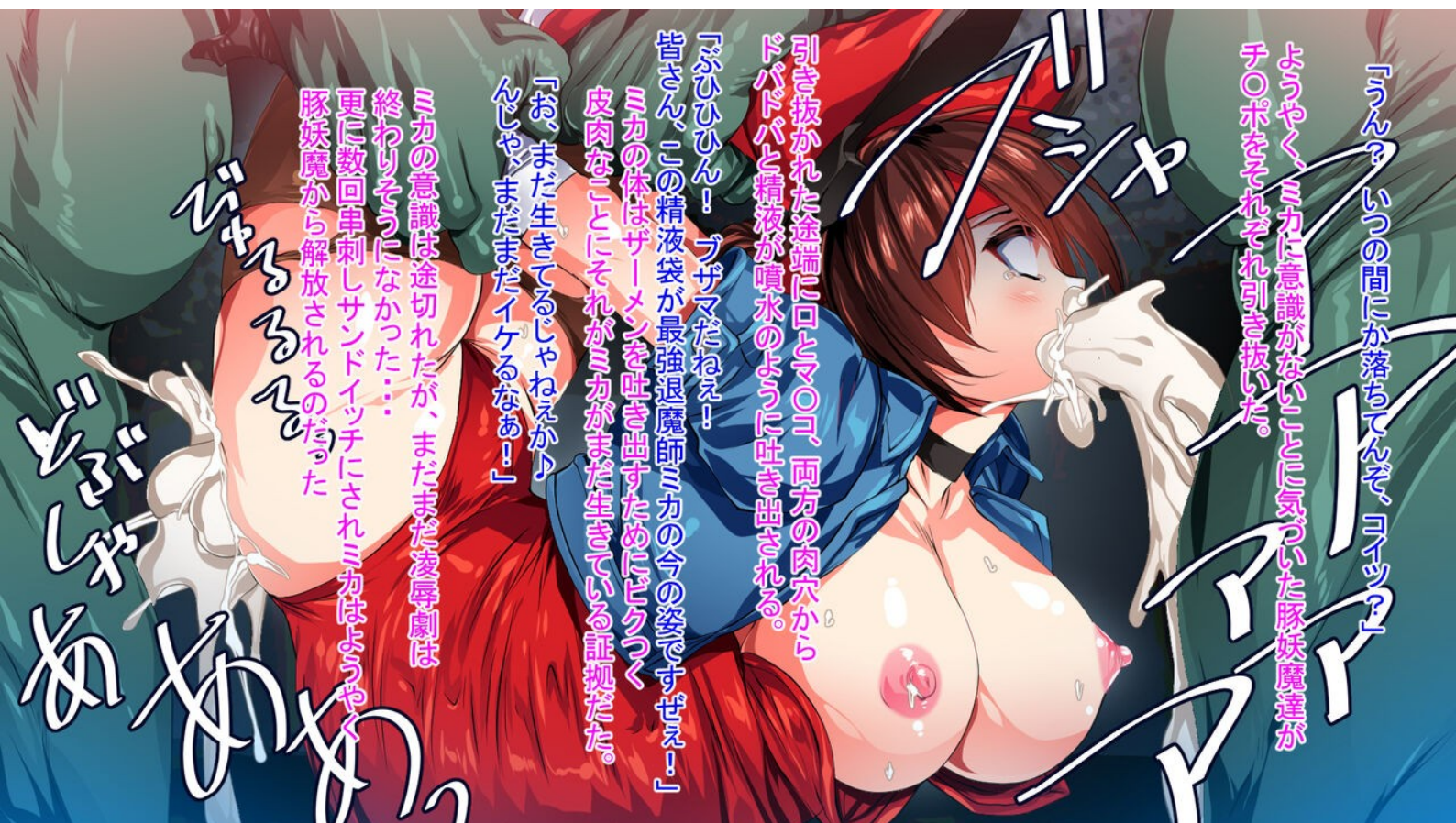
「お、まだ生きてるじゃねえかッ
んじゃ、まだまだイケるなあ！」

ミカの意識は途切れたが、まだまだ凌辱劇は
終わりそうになかった…

更に数回串刺しサンドイッチにされミカはようやく
豚妖魔から解放されるのだ。

びゅるるるる

どろどろ
ぬぬぬ



豚妖魔による更に数度の串刺しファックが終わり
どさっとミカは地面に投げ捨てられた。
口から、膣から、アナルから。
ザーメンがとめどなくあふれ出す。

どれくらいの時が流れただろうか。
ようやく、詰め込まれていた精液がすべて外に流れ落ち、
妊婦のように膨らんでいた腹部も元通り平らになった。

退魔師であるが故の屈強な体と精神のせいでは、
ミカの意識はゆっくりと戻ろうとしていた。
それは凌辱が更に長引くことを意味する
そのまま、気を失い続けていたほうが
よっぽどマシだったのかもしれないが――。



「う、くううう……わ、私は」

目覚めたミカは、恐る恐る体を動かそうとしたが。

「うぎいいいっ！ あ、がはっ！」

指一本まともに動かせない。
全身をむしばむ苦痛。
性器は無惨にも広がりきり、
赤い粘膜ピラを曝け出したまま。

「上級の妖魔たちは……どこへ……
け、圭は……まだ、無事なの……」

「こまでスタボロに犯されても
ミカは圭の身を案じた。だが、彼女への制裁が
まだ終わってわけではないのだ。

「ぞ、残念、だなあ！ お、お、お前は
俺たちのもんだあ！」

「そ、そんな！ 下級妖魔がこんなにも！」



「むぐおおおっ！」

「あゝ暖かくて気持ちいいロマンコ、だなあ！」

あの最強と呼ばれた退魔師である
榛名ミカが雑魚妖魔たちに犯される
その様が面白い見世物であるかのように
上級の妖魔たちは眺めている

「何だよマ○コはガバガバじゃねえか。ケツからやっとかあ」

股間に陣取った一匹が、ミカの肛門にチ○コを埋め込む。

「ふんむぐぐぐぐぐぐぐぐぐ！」

それまでの凌辱によりミカのマ○口はもう低級の妖魔ではなんのシミリも得られないほどにガバガバになっている。

「ケツのしまりは悪くなえなあ」

「ぎやはははゝそんなぶつ壊れたお古のマ○コ、使っわけないよなあ!」

「ふぐおおおっ！ん、ん、んっぐうっ！」

アナルを強引にまくり上げられ、ミカは苦痛に喘いだ。口を塞いだ肉棒のせいでくぐもった悲鳴しか出ない。

「それじゃあ、触手ならいっぱい入るだろ」

「お、名案！。何本ぶち込めるかなって」

壊れかけたマ○コには、野太い触手が何本も
捻じ込まれた。

「ぐもおおおおおおおおおっ！

おおおっ！ ふんぐおおおおおっ！」

「おぐ」おおおるじらっ！ お腹破れるっっっ！」

激しくのたうつ触手は、直腸のチ○コと絡み合いながら、
ミカの子宮まで潜り込んだ。
腹の薄皮を盛り上げて、ぽ「ぽ」とうねる触手。



「あぎやぎやぎやおおおおおおおおおおー！」

ミカの悲鳴が裏返る。
無防備な乳首にも触手が狙いを定めたのだ。

「乳首いたたきー！」

黒い乳首

「んぎゃー！ あああおおー！ きゃびっ！」

先端にとげの生えた触手が乳首の中にめり込む。

「乳首ってさあ、案外いい締めつけ
なんだよなあ〜」

ぐぼぐぼぐぼっ！
ぐちゅるるるっ！

肉の凶器がミカの乳首をいようにほじくり返す。



「あ、お前するい！俺も「うちの乳首使ってやるぞ！」

左胸にも触手が殺到する。
左胸に刺さったイボ触手に対してドリルのような触手が二本、ミカの胸をえぐりまくる乳首を強引に押し広げ、胸肉の中にまで押し寄せる触手に、ミカは目を見開くしかできない。

「いやいやいやいやあああああああつ！
もう触手はいやあああああつ！おっぱい壊さないでええええつ！」

「ゴゴゴ、女の胸の中もマ○コみたいでいいよな！」

ロ・アナル・マ○コ、そして乳首。
ありとあらゆるところで肉棒が暴れまわり、そして。



れえっ！

「おおおおおおおっ！」

跳ねまわり、びゅくびゅくと
という間にミカの胎内を

魔の俺たちが、あの榛名ミカにやってるぜえっ！」

んええ！ おぶぶぶぶっ！
「ぶっぶぶぎいいいっ！」

が跳ねまわり、びゅくびゅくと
という間にミカの胎内を

身勝手の射精を終えると、下級妖魔たちはミカの体から離れていった。

「いっお……んぐ……」

残されたのは、惨めにも穴と言う穴からザーメンを吹き零しながら、痙攣するミカの姿だけ。

「いっこれで終わり……？
も、もう、いい加減に、お、終わって……」



「おらあつー」これで終わりだと思っ
てんじゃねえだろうなあー！」

ミカの願いはかなわなかった。
転がったままのミカの姿を
見つけたほかの妖魔が、
再び口にチ○コを押し入れてくる。

書○き○ん○を

「う、あ……そ、そんなあ……
も、もう、いやあツ!!
妖魔たちは何体いるのよおつー!」

「てめえをぶち犯してえと思ってるヤツあ
幾らでもいるんだぜえつて!
全員相手させるまで伸びてんじゃねえぞおつー!」

ビクビクと惨めに痙攣を繰り返すミカの体に、
またしても妖魔たちが群がってゆく。
ミカが何体の雑魚妖魔に犯されたか?
そんな数はすぐに数え切れないほどになっていた。

一方、主は巨躯の妖魔に太股開きで拘束されていた。ミカが雑魚妖魔にマワサされている様を拘束された状態で見せつけられているのだ

「ほ、話が違う！ ミカを放してよう！」

「何を言っている。あんな与太話を真に受けるお前らが馬鹿なんだろうが」

「そんなう！ じゃ、じゃあ私を責めればいい！
その代わりミカを……」

先輩退魔師が無惨に凌辱される様を見せつけられる。それも自分のせいで……
主の必死の懇願に
巨大な妖魔はいつと笑う。

「良いねえ、そのお手本みたいなセリフ。
やられそうになってもお互いかばい合うなんて泣かせるねえ
いい退魔師になれると思うぜえ、あの肉便器みてえになあ
ギヤハハハハハ」



「そう、はなから騙すつもりだったってわけね！」

「妖魔がそう都合よく言う」とを聞くわけ無いだろうがよっ
ギヒヒ、ホント退魔師なんざバカだねえ」

圭は悔しさのあまり小刻みに体を震わせる。
私のせいだ。
私をかばうために、ミカは……

「ほ、他の退魔師や退魔特捜の救援が来るわ。
アンタたちなんか消し炭になるわよ！」

「その前にお前らが持てば良いがなあ、
お仲間の退魔師が発見するのは生〆〆〆見てえに
やりつづされたデメェラの成れの果てようっ！」



「ま、」ちや」ちや」つるせえガキには
「イツをフチ込んで大人しくなつてもらうか！」

巨大なチ○コが圭の股間に押し当てられた。
その大きさに、圭の顔がさうと青ざめる。

「えっ……ひいっ！ な、なによ、これ？」

「お前、処女だろう。初体験がこんなでかいチンポに
なるなんて、嬉しいだろお！ 退魔師」っついでに
初めての経験っつーのも悪くねえぞお」

「そ、そんなわけないでしょう！
ふ、ふざけないでっ！ こんな汚いもの……
わたしがへし折って……」

ずん

「ヒヒヒ、震えちゃって可愛いのなあ
退魔師なんてイキってもただのメスガキか」

嘲るような妖魔の声に、
圭は必死に声を荒げて抵抗する。

「ば、バカにしないでっ！」

退魔師はそんな脅しに屈したりしないわっ！」

「や、やめ、むぐうっ…け、圭だけは、あぐう」

雑魚妖魔に犯されながらも必死に呼びかけるミカ
だが、そんな姿は妖魔にとっては滑稽な
見世物でしかないのだ。

「そうかそうかあ、そんなじゃあ見せてもらおうか
退魔師の矜持っっーやつ…」



いうなり、妖魔は巨大なペニスを濡れてもいない
 主のマ○コに一息にねじ込んだのだった。

「いっぎゃああああああああっ！
いだいだいだいだいだいだいだい！」

二人の悲痛な悲鳴が闇夜に木霊するのだった

「ぬいてぬいてぬいてぬいてええええっ！
こわれるうっうっうっ！」

激痛に苦しみ悶える主。だが妖魔に鎖で縛り付け
られている主はのがれることはできず、
その足をがっちり掴み、妖魔はいやらしく笑った。

「何だよお、まだ亀頭しか入れてねえんだぞお」

「いっきやああああああああああああっ！
いだいだいだいだいいいいいいいいいっ！
ミカあ、助けてえ、お腹あ、お腹裂けるうっうっ！」

初めての体験がこんな苦痛になり替わるなんて。
主は泣き叫びながらミカの助けを求めるのだった。



「やっぱ女の泣き顔はぐつとくるよなあ
おまえいい顔してるぜ〜」

「う、うっ……い、痛あ……
も、やめ……」

「……何だあ、もう誤りだしやがって
調子こいてたくせにただの雑魚かよ」
妖魔は冷めたような口調でそうつぶやいた。

「へへっ、残念だナァー
退魔師とか言ってイキってよお
すぐに先輩助けてーってか
もうちよつと踏ん張って見るよ、おい！」

股間は引き裂ける様に痛むが、
妖魔の侮蔑の声は圭の心をさらに鋭く抉った。

「……じゃない」



「ん？
何か言ったかあ？」

「あ、あんたみたいな下衆妖魔に
屈するわけないじゃない！」

処女喪失の痛みに震えているが、
圭は必死に眉を吊り上げて叫んだ。

こんなことでミカの信頼を失って堪えるものか。
眼の前で犯されているミカ。そんなミカのためにも耐える
そう決意するのだが

「退魔師は妖魔の言いなりにはならない！
お前も必ず倒してやるんだから！
その首へし折ってや……るんだから……つぎ」

「それぞれ！ そういうのが聞きたかったんだよな！
退魔師は妖魔に屈しない、キリッ！
見てえな、クソ無駄な抵抗をよお！」



「良かったぜ！まだまだ楽しめそうだな！
それじゃ処女喪失チ○ポ串刺し刑続行！」

妖魔は嬉しそうに馬鹿笑いすると、
チ○ポの瘤が浮かび上がった部分までを
さらに圭のマ○コにねじ込んだ。

「え……なに、いだあああああああああつ！
痛つ、いだあああああああああいいいいいっ！
あつぐああああああああああああ！」

圭の下腹がポコリとペニスの形に浮かび上がり、
さらに瘤までもが浮かび上がる
凶悪チ○ポは容赦なく粘膜を引き裂き、圭に激痛を与えた。

「ククク、たまらねえだろ、このチ○ポ！
退魔師の雌穴をぶっ潰すための特製だぜ！」



妖魔は腰を激しく動かし、肉の凶器をずんずんと突き上げてくる。

「ぶぎよおおおおお！
ごぼべげげげgほほほほほほほほほ
ぽぽぽぽぽぽっ！」

すぼ、ぐぼっ！
どすっどすっ、どすっ！
主の内臓はぐちゃぐちゃに押しつぶされ、
苦痛が大波のように押し寄せる。

「ほうね、雌ガキビッチが大好きな
ザーメンだぞぉー！ マ○コにしてみるだろお」

ぶっしゅああああああっ！

傷だらけの胎内に粘ついた精液が遠慮なく流し込まれる。

「ぶべっ、ばああっ……う、うおっ！
み、ミカ……」

どくどくと精液は流し込まれる。
主は自目をむいてビクビクと体を痙攣させる。
もはや退魔師の矜持などとはどこなりへと消し飛んでいた。

「ふっ、い、これだから退魔師の女を犯すのはやめられねえなあ……」
バカ見てるにイキがった退魔師のマ○コに妖魔デンプで理解らせるっ！のはよおギヤハハハハハハハハハ！」

ずるり。
長い時間をかけて、ようやくチ○コが引き抜かれた。
栓を失い、「ぽ」ぽと精液が流れ落ちる。

「あ、ぐっ、あ、あひっ……」

「くくく、最高に思い出に残るロストバージン
だったろお？ ひひひひひひひ
てめえの処女奪った相手のこと忘れんじゃねえぞ
退魔師」このお嬢ちゃんよお
ヒャーハッハッハ」

妖魔は惨めな主の姿を見下ろし、心底楽しそうに
笑い続けた。その耳障りな声を聴きながら、
主の意識は次第に遠ざかっていった。

「ミカ……た、すけ、て……」



「さあーっと、今度はボクの番かなあ」

雑魚妖魔に散々弄ばれたミカ。

この場に似つかわしくない無邪気な声が出たかと思うとミカは触手で空中に吊り上げられていた。

グロテスクな形の触手は、ミカの四肢をぎゅうぎゅうと締め上げ、関節に痛みを与える。

「くっ、くっ……あ、あなたは……!」

女退魔師を子供の姿で油断させて襲う妖魔だ。だが、今はその本性を隠すつもりは無くハナから全裸で異常に伸びた触手ペニスを見せてつけている。

妖魔に散々弄ばれた、あまつさえ救おうとした圭までも無惨に処女が奪われてしまった。さしものミカも自分の心が今度こそ本当に折れていくのがわかる。

「いひひっ、ボクの事知ってるんだねえ嬉しいなあいい格好だよねえ、ミカさん? ボク、お姉さん見たいな強い退魔師をメチャクチャにするのが大好きなんだよねえ」



「や、やめ……もう、はなし……」

「いやいやいやあ？
これからが楽しいんだよお。
お姉さんのやられ姿見てたら我慢できなくてさあ
そのスケベな体で遊ばせてね
ボクの手○ポ、全部ぶちこんで上げるよお」

ミカは背後を振り返り驚愕する。
大きく開かれた股間には、
少年妖魔の股間から枝分かれした
無数の触手が集まっていたからだ。

「う、嘘……そんなに……」





「うぎぎぎぎぎぎぎいいいいいいいい!!
抜いて抜いて抜いてえええう!!
あうううううううう!!」

再び股間が引き裂ける激痛。
腹が破裂しそうな激痛
ミカは恐怖で顔を
こわばらせて泣き叫んだ。

「え? 何言ってるの?
「二」までやられといてバカなの?」

ここからが楽しいんだって。
ほら、お腹が変な形に膨らんでるでしょお
内臓のこの部分が気持ちいいんだよねえ」

「おおおおお尻壊れるうううう!!
お腹、があああああう!! うぎぎあああああ
あああああああああああう!!」







「わっ……お……」

猛烈な吐気が
ミカをおそつ。

「わ、私のお腹……どうなってる……
怖い……いや、いやいやいやああ」

「ぶっぶっ……
もうすぐだよ？
ホラホラ、お尻もっと広げて」



「うん、ミカさん見たいなつよい(笑)
退魔師は触手まみれがよく似合うねえ
どう？体の中、触手づけになった」感想はあ？」

妖魔はにやにやと笑いながら
ミカに問いかけるが、ミカの意識は段々と
遠ざかりつつあった。

「んっ、お……んっ」

肛門を引き裂く痛み。
内臓をぐちゃぐちゃにかき回される苦痛。
気道を塞がれた恐怖。
全てがミカを襲う。



「あれ？返事がないなあ
足りないってこと？
そんじゃ追加ねー」

「んぐもおおおおおおおおおおっー」

妖魔な息も絶え絶えなミカの唇に
更に触手を挿し込んできた。
顎関節がきしみ、ミカは目をむいて悶える。

「今度は口から逆行するよー
ほら、食道を挟んで、胃袋…
はは、もう胃も満杯だったけど、
気にせずれっつこー」









「それじゃ、そろそろ
シメだね」と
妖魔の言葉と主に、
ありとあらゆる触手から
勢いよくザーメンが
放たれた。

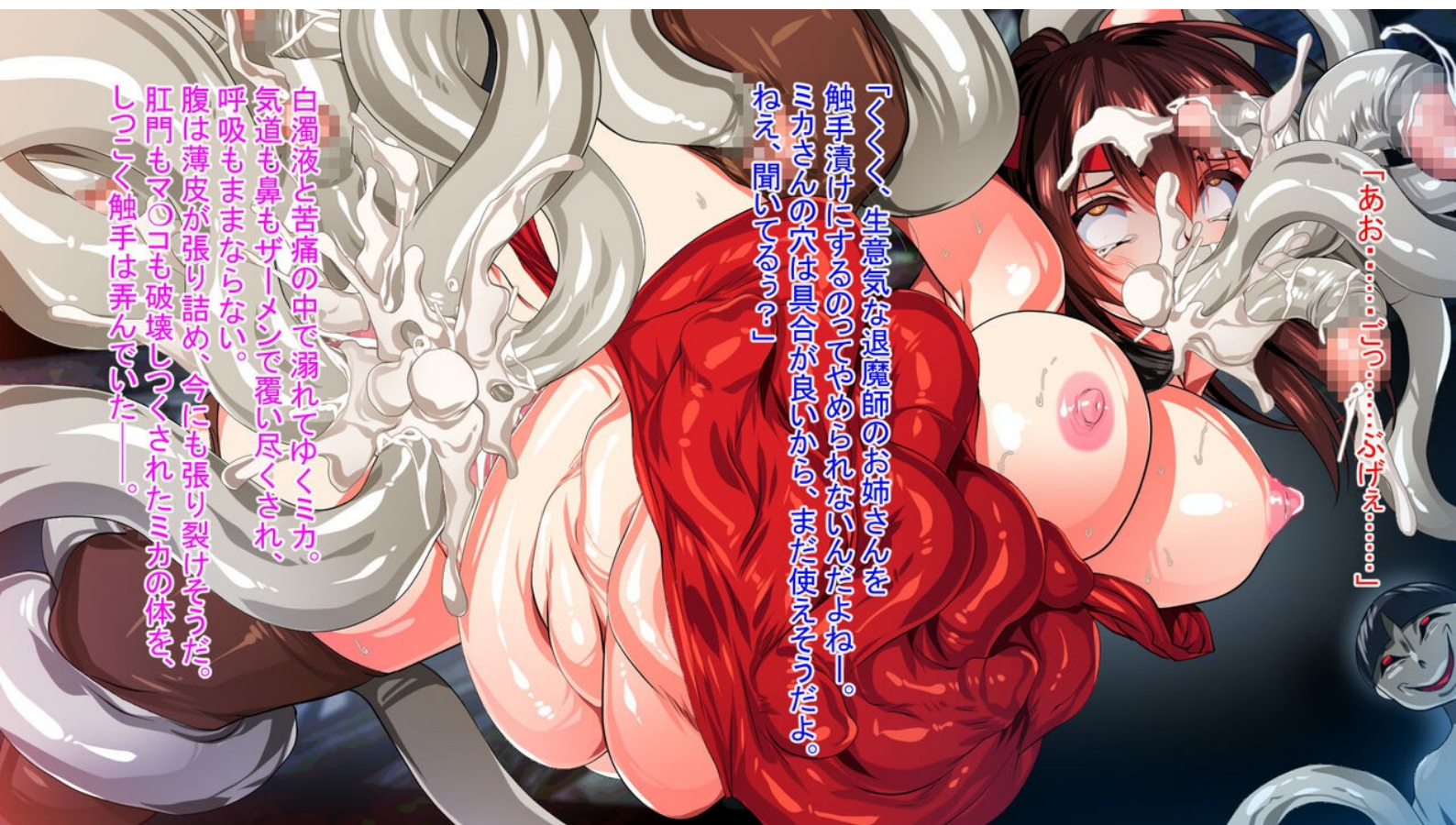
「~~~~~」

大量のザーメンはあっという間に
ミカの穴と言う穴を満たして
全てを白く埋め尽くした。

「おお………うん………んずえ………」

「くく、生意気な退魔師のお姉さんを
触手漬けにするのってやめられないんだよね！。
ミカさんの穴は具合が良いから、まだ使えそうだよ。
ねえ、聞いているっ。」

白濁液と苦痛の中で溺れてゆくミカ。
氣道も鼻もザーメンで覆い尽くされ、
呼吸もままならない。
腹は薄皮が張り詰め、今にも張り裂けそうだ。
肛門もマ○コも破壊しつくされたミカの体を、
しつこく触手は弄んでいた――。



全身の穴に触手を捻じ込まれ、文字通り触手漬けになったミカ。だが悪夢はまだ終わっていないかった。意識を取り戻したミカは再び妖魔にその傷ついた身体を掴まれていた。自分の数倍はありそうな体躯の巨大な妖魔。そして周りにも同じような巨大妖魔が先走ったテンポをミカに突きつけている

「う、うぐうぐわたし、動けな……」

巨大な手ににぎら……放し、て……」

「お、目が覚めたあ、ミカお姉ちゃん？
次は大きいお兄さんの相手を頑張ってもうっよ
サイズ感が違い過ぎるけど
頑張ってねー（笑）」

ミカを犯し切った少年妖魔の声が聞こえる
少年はこれから起こる悲惨なショーの開始を
心待ちにしているようだった

「お、おで、いっでお人形遊びするっ
チンすぽすぽして気持ちよくするっっ」

「な、何の……」

お人形……ま、まさか」

ミカは苦痛に喘ぎながらもその言葉に青ざめた。
自分を身体ごと握りしめている巨大な妖魔……
過去、ある退魔師が巨大な妖魔に敗北した末路を
思い出したのだ。

その退魔師はあまりの体格差姦に原形をとめないほどに犯され完全に破壊された状態で発見されたのだ。当たり前だろう、明らかに胴体よりも太いペニスである一般人、いや並みの退魔師でも即死する代物だ。

「お、おで、お人形遊び、好きいだ、退魔師、オナホールにして遊ぶううう！」

「ひいっ？」

う、嘘でしょ？なんなのそのサイズ……？

あれを私に……

いいい、いやああああああつ！」

ぬう……

ミカは絶叫する。股間に押し付けられたのは、あまりにも太すぎるペニスの姿だった。更には同じように巨大で愚鈍そうな妖魔達がミカを取り囲み、そのペニスを向けているのだ。この妖魔もそんな体格差など気にすることなくその巨大なペニスを捻じ込みようとする。そしてその予感的中してしまう。

「おほっ、チンポがぐりぐりしてきほちいい
ホラホラ、おでの大きなチンポが入るぞお」

「いやいやいやいやあああああつー！
止めてやめて、もう壊れるっ！
死んじやうつゝつゝつゝ！」

ぐちや...

ぐりっ

ミカは恐怖のあまり絶叫する。
ぐちよりと亀頭が傷ついた粘膜ビラに
押し付けられ、全身から冷たい汗が吹き上がる。

「大丈夫う大丈夫うだあ♪」

榛名ミカは最強の退魔師だって聞いているだあ
これくらい平気だあ、それに心配すんなあ...壊れたら
おまえ捨ててもう一匹の雌にするでえげひやげひやげひや」

「おつがあああああ……あ、こ、げ、げ、お、お、お、お
ぬ、ぬ、ぬ、ぬい、て……」

ミカは息も絶え絶えにつぶやく。
臓腑をペニスで持ち上げられ、呼吸もままならない。

「うっん、せつかく入れたのに？
しょうがないだなあ？」



巨大。ペエは臍肉をひっかきだしながら、引き出されてゆく。

「うーっ、うべええっ！ な、ないぞ……
出ちやうつうつうつー！」

ランコは裏返り、子宮までも引き出されそうになりミカは絞りだすような悲鳴を上げ泣き叫んだ。

「なんだあ、せつかく抜いてやってるのに文句を言うなあ、そんな言うならな。」「

ずんっ！
ずんっ！
ずんっ！

ペスは何度もミカの胎内を往復する。
そのたびに、内臓は押しつぶされ、粘膜は引きちぎられる。

く、苦しいっ！ も、もう終わって……
も、無理………
無理………
無理………

圭の身代わりになる……という決意は、
巨大妖魔に犯されるという事が
どれほどの地獄か、ミカはその身を持って
今、思い知っているのだ

「んっ？ 何だあイキが悪くなっちゃってるんやっ
オデ、もっと気持ちよくなるっ
まだまだ、終わりにゃねえぞっ」

「おでのザーメンだあつ！
たらふく飲み込めえええ！」

どぶしゃあああああつ！
ミカの傷ついた体内に大量の精液が放たれた。

「うーん、うーん」ペ〜ペ〜ばあああああ
あああああおおおおお！
ぶっぎゃあああああ

あまりにも大量の精液は、あつという間にミカの胎内を満たし、結合部からあふれだした。胎内から精液で爆発するのではないか、そんな絶望がミカを覆い尽くす。

「うふひいひいゝますます出たであゝ」

ずるり、と妖魔はペニスを引き抜いた。
「ぽぽ」と音を立てて精液が開きっぱなしの
ヴァギナからあふれだす。

「がっ、うっ……ぽぽっ……」 お、おお……」

「ぽぽ」
「ぽぽ」
「ぽぽ」

ミカはビクビクと痙攣を繰り返すばかり。
ズタボロの無力な肉人形を掴みなおし、
妖魔はにたあと笑う。

「いひひいお前具合いいお人形だなあ、
普通の退魔師と違ってオデのテンポで
死なねえし、気に入ったなあ、
まだまだ可愛がつてやるでよおほつらオデの
兄弟たちもテンポそろえてるなあ」

精液の溢れるヴァギナに、再び巨大ペニスが勢いよく突き込まれた。

その言葉通りミカを取り囲んだ妖魔達は、何度も玩具のようにミカの体を振り回し、ペニスを突き入れ好き勝手に性欲を満たしてき、巨大妖魔の群れが一巡するまで、それは続けられたのだった

「はなしてっ！ 放してっば！」

「なあにいつてるんだよお
やっと俺の出番が回ってきたんだぜえ？」

それはこの一連の凌辱劇を仕組んだ低級妖魔の姿だった
圭を餌に榛名ミカをおびき出す。その策略を仕込んだのが
この猿のような妖魔だったのだ。

（ミカは……ミカはどうなっているの？
切り抜けるには？）

「七瀬圭だったかあ？
テメエのおかげで榛名ミカをふちのめせて
妖魔側からしたらやってたりよお」

圭はその言葉にぐうの根も出ない。
もがきながら、圭は必死に考えるが、思考は
ぐるぐると回るばかりで形にならない。



「くぅぅぅぅぅ！身体さえ自由なら
あんたなんか……！」

圭は必死に背後の妖魔をにらみつける。

「ぶひひひひひ、可愛いねえ、
頑張つてイキがっちゃってさあ
処女膜ぶち破られた割には元気じゃねえか」

「この雑魚妖魔あ、！
絶対、絶対ぶちのめしてやるう！」

「様名ミカは、もうお終いよお、
メチャクソにやられまくって
後はトドメさせられるだけ、残念だったなあ
ま、お前の相手は俺がしてやつからよ
お互い雑魚同士仲良くやるっぜえ」

妖魔は生臭い息を吹きかけながら、
圭に腰を押し付けてくる。

「や、やめてっ！
変なモノ押し付けないでっ！」



「変なモノって……これかい？」

尻肉から腰に掛けて生暖かい、質量のある長いものがのしかかる。
背後を見た圭の顔が引きつる。

『え……ひいいっ！
な、何それっ！』

ずるっ

それは、まるで蛇のように長いペニスだった。
太さも圭の二の腕ほどもある。

そのダロテスクな肉蛇はクネグネと動いて
圭の柔肌に亀頭を擦り付けるのだった。

「これをよおケツ穴に挿し込んでやるのよお
マ○の最初ラテ破ってやりたかったけどよお
ケツマ○の処女で我慢してやるぜえ」

「い、いや、お尻に、そんな……
いっぎいいいいいい！」

抵抗する圭には構わず、妖魔はブルマを押しつけて
ペニスを肛門に突き立てた。

「ギヒヒ、ケツマ〇〇処女いただきたい！」

肛門括約筋は限界まで引き延ばされ、圭は脳天まで
駆け上がる苦痛に悶える。

「ガキの割に鍛えてやがるからキュウキュウ締め上げ
てきやがう、とんだどスケベだなあ、おい？」

「い、痛あああああああっ！
いや、いやあああああっ！」

「肛門が真ん丸に広がっちゃったよお
見せらんねえのが残念だなあ」



「ほら、腸の角をガンガン小突いてるぜえ！」

ぐぼぐぼと尻肉の中を逆行するペニス。
ずんと突き上げられ、圭の腹肉がペニスの形に
浮かび上がる。

「……っがあああああああああっ！」

「おーききき、俺はよお、メスの退魔師が
ケツ穴穿られて泣き叫ぶのがたまんねえのよ」

がし

肛門を引き裂かれる痛み。
内臓を抉られる苦痛。
その二つが主に同時に襲い掛かった。





「さて、お尻の一番奥にザーメン
プレゼントしちゃうよお」

容赦のない妖魔の言葉を聞き、圭は震えあがる。

「や、やめてっ！ 無理、無理っ！
もう入らないっ！」

「ああん？、もう遅いっ！の
もう出し始めちまつてるぜえ、
テメエのどスケベケツマ○に文句言いなあ！」

びゅくびゅくと妖魔はザーメンを放ち始めた。
見る見るうちに圭の腸内にザーメンがたまってゆく。

「びゅーーー」
「お尻、熱いっわー」

「あうあああああああうっ！
お尻、熱いっ！っ！
いぎっ！っ！っ！っ！」





「ぶふぶふぶ、射精射精♪
ホラホラ、もう胃まで上がって来たぜえ？
俺はよお、雑魚妖魔だけだよお
チンポの大きさと出せる量には自信あんだぜえ」

「うふふうふ！」

圭の顔色が変わる。
何かが、いや精液が。
喉元まで迫ってきているのだ。

「腹ア、パンパンだろお？
我慢し過ぎは体に良くねえぜ、
オラ、もういっちょ出してやらあつ！」

びゅくびゅくびゅくと
ピストンしながらの射精が
さらに勢を増していく

(い、いやあああああつ！
怖い、怖いっ！)





「あー、最高最高う！ 退魔師は丈夫だから
好き放題出来るけどよお、並の退魔師なら
ここまでやるとおつ死ぬからなあ。
てめえ才能あるぜえ、もちろん肉便器のなあ」

妖魔は満足そうに腰を振り続け、圭の
緩み切った肛門をさらに挟む。

「うっほおおおおお……げんげん」

「んゝてめえのケツ穴気に入ったわあ。このまま
ペットにしちまってもいいねゝ」

「ミカあた、助け……」

「うっほお」

「ああん？ 氣い失うんじやねえぞ。
これからが榛名ミカの最期のお楽しみなのによお」

「うっほ」

妖魔の言葉通り、この後圭は
悔やんでも悔やみ切れない
人生で最悪の経験をする事になるのである



妖魔がミカの四肢に噛みついて宙に釣りあげている。
ぐったりとなったミカはもはやすがままだ。
暴虐で広がりきったマ○を晒したまま、
かすかに震えるだけだった
周りにはミカを一通り犯し切った妖魔達と
その更に外側に遠巻きに
下級の妖魔達が輪をなして取り囲んでいる

「……………あ……………もう、やめて……………」

「おいおいおいおい、まだくたばるなよなあ」

「そーそー、おねえちゃんは
最強退魔師さんでしょお
きゃははははははははははははははははっー」

「……」からが今日のメインディッシュだっーの「……」

口々に囁し立てるミカを犯していった妖魔達。彼らの言う通り
この夜の饗宴はこれからクライマックスなのだ
ミカは妖魔達が呼び出した肉の塊から触手が生えたような
異形の化物に拘束されている。

「い、ぎ、い、い……………も、もう……………」

「これ以上なにを……………」かっつんの……………」

「それじゃ
それじゃあ、最強退魔師処刑シヨーのはじまりだぜえ」

不吉に笑う妖魔達。
その言葉に震えたミカが視線を下した、
その瞬間……。

「え？……な、何、それ……
嘘、でしょ……だって、そんな……」

ミカの顔が更に青ざめる。
股間に近づいているのは、
肉塊から競り上がってきたあまりにも
巨大すぎるテ〇ポだったからだ。

「震えちゃって可愛いねえ、ミカお姉ちゃん！
でもさあ、冗談じゃないんだよねえ」

少年妖魔が心底楽しそうに笑う



「無理！無理無理無理無理っ！
入るわけ、ないいつ！お願い、やめてえ！」

「おうおう、情けねえなあ、
そんなに怯えちまってよお！
お前だって俺たちを散々
祓ってきただろうが！」

「死ぬ、死んじやう！
そんなの入れられたらあああああっ！！」

ミカは恐怖のあまり絶叫する。
そんな無様な退魔師の様子を、妖魔は
高笑いしながら嘲った。

「大丈夫大丈夫、さっきまで
散々オナオ扱いされちやってるから、
簡単に入っちゃうんじゃない（笑）」

「だったら、また大きく拡げてやるよ。
へへ、親切だろお？」

極大デ〇ポの周囲に無数の触手が群がって伸びてきた。
ミカは絶望と恐怖に目を見開きながら
その様子を凝視することしかできない。



「おほっ！ 拡がるじゃねえか！ 子袋まで丸見えだぜえ」

「まだまだ広がってるねえ！なんてスケベなマ○コ！」

「そんなにデカチンが欲しいのかよお！」

「うー」ギギギギギギギギギギギギああああ
ああああああああああああっ！

無數の触手がミカの瀕死マ○コを強引に広げにかかった
みちみちみちい！
肉が引き裂ける音が響き、ミカの膣内が
曝け出される。

「さげるさげるうっ！ うおおっ、あつがあああっ！
うぎゃぎゃびびげげおおおっ！」

「おいおい、ミカちゃんよぉ？」「うちがメインディッシュだぜ？」

「ぎゃひつ、い、い、い、い、いやああ……
も、無理なの、無理に……..
あがぁ、あ、あ、あ、あ……..」



じりじりと巨大ベニスが近づく。
ダメだ、もう。
死ぬ。あんな凶器を入れられたら、もう
死ぬ。死ぬ。死ぬ。
ミカは退魔師としての自分の終わりが近づいていくことを
悟らざるを得なかった

つめん、圭……あなたを助けられそうにない
ミカはこんな地獄へと圭を巻き込んでしまったことを
ただただ悔いた

「そらよっ！退魔師なんてのになった
テメエの行いを後悔して喰らいなっ！」

「ぶっぎゃああああおおおおおおおおお
おええええええええええええええええげげ
げげげげげげげげげげおおおおおおおお
おおおおおっ!」

ボク?

触手に無理やり捻げられたマ○コに、ついに肉の凶器が突き込まれた。
ミカの内臓をぐちゃりと押しつぶし、腹を突き上げ、陰唇を引き裂いて巨大処刑チ○ポがブチ込まれる。あまりの勢いに、肩と股関節が外れてしまった。

「退魔師大好物の妖魔特濃ザーメン……人生最後に味わってるねえっ！」

「うわー、鬼畜う！
きやははははははははははっ！」

「おぼぼぽっ　ぽぽぽげげげげげげげげげげつ」

ミカの腹がさらに膨れ上がる。
人間の体とは思えないほど醜く膨れ上がった腹部。
逃げ出すことは出来ない。
ミカには絶望と苦痛しかなかった。

「さあ、クライマックスだぜえ、
ガキも良く見とけやあ」

もはや虫の息のミカの唇に、更に触手がねじ込まれた。
そのイラマチオの衝撃に「一瞬だけミカの意識が戻る
その一瞬だけ自分の最期を見つめる」と視線があった

(おほお……け……主……)

「めん……わた……し……も……」

直後、胃にまで達した触手から、
放水のごとくザーメンを流し込まれる。

「ん……ん……ん……」

「追いザーメンしちゃうなんて優しいーっ
ミカお姉ちゃん嬉しい？」

「これでハラワタまで全部ザーメン漬けだぜえ！
退魔師のさいごとしちゃあ、最高だろおお？
ギャハハハハハ」

「……お……」

ミカの視界が濁る。

もう、何も見えない。「こ」に最強と謳われた

退魔師様名ミカの人生の毒は

汚れた白濁液と共に幕を下ろしたのだった

そして。

「oooooooooooooooooo」

ねっとりとした精臭に満ちた闇の中、
それでもまだミカの体に精液を注ぎ込む音。
粘膜が引き裂ける音。
ギンギンと関節がきしむ音。

その音をバックに
宿敵への制裁を果たした妖魔の歓喜の雄たけびと
主の絶叫だけが響き続けるのだった――。



「そうそう、穴さえあればザーメン出せるしなあっ」

そう言う、妖魔達はそれぞれ射精を始めた。
ミカの穴と言う穴に精液が流し込まれる。
マ〇コ、アナル、双乳、喉、それぞれの場所で思い思いに射精し
みるみるうちに、ミカの体が精液で膨れ上がる。

「おほ……おぶげっ……おぶげっ……」

空気の通り道をザーメンが通るたびに
喘ぎ声のような無様な音が奏でられる

「榛名ミカあ、ザーメン美味いかあ？」

「もう、聞こえてないんじゃないのぉ？」

「退魔師の末路なんて悲惨だねえ、グヒヒーン」

回々に嘲る妖魔の声に返す言葉など、
もはやミカには無い。

ただ、突き込まれるままに揺れ動いているだけだ。
妖魔達は仕上げとばかりザーメンで
退魔師榛名ミカを穢し切っていく。

「ギャハハお前、出し過ぎたるおが？」

「イヤイヤ、足りないでしょ。」

どスケへ退魔師ミカお姉ちゃんにはさあ」

好き勝手なことを言いながら、
最後の一絞りとはかりにザーメンを注ぎ込む

(ミ、ミカあ…
ご、ごめんなさ…い)

圭は目の前で自分を助けようとした
先輩退魔師が無惨に犯し潰されていく姿を
ただ見るしか無かった。
だが、そんな圭を妖魔達は解放する。

びゅっ

びゅっ

びゅっ

びゅっ

「おい、テメエは逃がしてやんよ、

様名ミカとの約束(笑)だからなあ

お仲間の所に助け呼びに急いだほうが良いぜえ、

この後、先輩退魔師をまだ雑魚共が犯しちまうと

五体残るかかわかんねえからなあ、ギャハハ」

ただその見せしめとしての末路を伝えさすためだけの

妖魔の悪趣味活悪辣な余興だった



東京中で最強と呼ばれた退魔師様名ミカが消息を絶った。搜索をしていた退魔師たちのもとへずたばろとなった圭が現れ、ミカの居場所を伝える。退魔師たちが救出にその現場に駆け付けたときですら凌辱は終わってはおらず、ミカへ制裁を与えた上級妖魔がその場を去ってなお、精液の海と化したゴミ処理場で未だに数十体の下級妖魔が既に物言わぬ亡骸となり果てたミカを犯している最中だった。

ミカの末路は無惨そのものであり、凌辱に使われた穴でまともなところは一切なく身体中の内も外も全て精液で溢れかえっていたという。歴戦の退魔師でも目を背けるほどの暴虐の限りが尽くされたことを見て取れた。肉体も魂も、その尊厳すら全てを犯し尽くされたミカの最期は妖魔のブラックリストに載り復讐の標的とされた退魔師の末路として、最後の姿は東京中の退魔師を震撼させることとなる。











































































































































































































